

2013年2月24日マタイ 6:1-4「名誉欲からの自由」

田中角栄という政治家は、昭和を代表する総理大臣の一人であります。人の心をつかむ名人だったと言われますね。非常に雄弁な政治家でもありましたので、彼の演説には多くの人が魅了される。そうしていよいよ群衆の熱が高まったところで、何も書いていない白紙を渡せと、秘書にあらかじめ申し付けておくそうです。言われたように秘書がそれを持っていきますと、角栄さんはぱっとつかんで読んだ振りをしまして、「君、人々がこんなに熱心に私の話に聞き入っていてくださるのに、もう時間ですとは何事だ！！」なんて怒った芝居をする。それを聞いて群衆はまたやんやの喝采とあいなるわけですが、なんとも自分の見せ方を知っている。この世におきましては、そんな風に自分を上手に演出できる人が出世なさいます。政治家などというのは特にそうかもしれませんが、この人に善くしてもらったと思わせたら勝ちというところがある。あの人は立派な人だと、人からの信頼を得なければどうにもなりません。まあ、偉そうに政治家批判をしておりますけれど、牧師だって似たようなものですね。「先生」などと呼ばれていい気になっているのは、国会議員か牧師くらいのものですから。他の牧師さんのことは知りませんが、少なくとも私に関しては、角栄さんと同じようなさもしい自己演出を施しているように思い、反省させられます。

そういう姿は、今日のイエス様の言葉とまったく対極にあるように思います。「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。」

今日から6章に入りましたが、1～18節にかけまして、一連のシリーズで3つのテーマが取り上げられています。名づけるならば、偽善者シリーズとでもなりましょうか。全体を通してのイエス様の教えの主題は、今お読みした1節の言葉です。「人の前で、人からの評価を求めて善行をしないようにしなさい」。この教えを展開するために、3つの具体例をあげておられます。施し(2-4節)、祈り(5-15節)、断食(16-18節)です。これらは、イエス様がお語りになった当時のユダヤ社会において、敬虔で信仰深い人々が重んじていた三つの善行です。

同じパターンで三回繰り返されます。まず「偽善者たち」のありようが示され、「彼らはすでに報いを受けている」と言われる(2, 5, 16節)。それに対して、そうではない新しいありかた、イエスの弟子にふさわしいありようが示されまして、「そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」と繰り返される(4, 6, 18節)。

「報い」ということが、一つの大きな鍵となってきます。全体テーマとしての1節にも示されていますね。「さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。」これはどういうことかということを経済的に読み解いていきたいわけですが、最初にはっきり申し上げておきたいことがあります。ここでのイエス様の教えの中心は、「人の目を気にすることから自由になりなさい」という解放のメッセージであるということです。

この世の慣わしに縛られた、私たちの窮屈な心を解放しようとしてくださっているのです。ですから私たちは、今日の御言葉から、こうであってはいけない、ああでなければいけないと、窮屈な掟を作り出すのはやめましょう。これは山上の説教全体について言えることです。私たちはどうしてもそう考えてしまいます、そして「厳しい・・・」と一人でうなだれてしまう。それは仕方ありません。今日のところでも「そうならないように注意なさい」という形でイエス様の教えは伝えられています。そう聞けば、「そうならないようにしなくては・・・」と緊張するのが当然です。でも、メッセージの中心を見失ってはならないのです。中心にあるのは解放のメッセージです。縛られた心を解き放ち、本当の自由へと人間を招く、福音が語られているのです。

人の目を気にして善行を行うことは、偽善であり良くないという、そんなことは私たちだって良く知っております。でも私たちの現実にあって、そういう自己演出を一切しないで生きていくことはできません。そして、時にそういう人目を気にする思いのせいで、大きな苦しみを覚えている人がいます。人の評価が気になって仕方ない。点数をほしがるといいますか。人からほめられないと、自分のやっていることの意義が見出せない。それは、そういう「人からの評価」によってしか自分の値打ちをはかれないということであると思います。そしてそれは、根源的な劣等感、自信のなさの表れです。大人になっても点数稼ぎのいい子を演じ続けて、苦しくてどうにもならなくなっている人もいると思います。自分は偽者だという思いは、イエス様に言われるまでもない、自分でよく知っている。そして、それが苦しいのです。

あるいは逆に、こんなにがんばっているのに自分は誰からも評価されないと、苦しみを続けている方もいらっしゃるかもしれません。善いことをしてあげたのにお礼がないとの怨みから、気を病む人もいらっしゃるかもしれません。こんな話も紹介されていきました。とても気配りをされる御婦人がいらっしゃるって、他の人や先方に知られないように配慮して、「絶対名前を出さないでください」とも言われるのだが、ご自分の心のメモ帳にはしっかり几帳面に記録してあるようでして。忘れてしまえばいいのに、あの人にはこうしてやったと覚えている。そうするとどういうことになるかということ、その援助してあげた人がそれに気付かないままだと、だんだん腹が立ってくる。結局、見返りが与えられないとふくれてしまうという結果になる。「先生、ちょっと聞いてください、だれにも言わずにいたけど、先生にだけは知っていていただきたい」なんて言って、「あの人にはこれをしてあげた、この人にはあれをしてあげた、それなのに私はあの人たちからこんな仕打ちを受けた、もう我慢できない」などと怒りをぶつけてこられる。そんな方がいらっしゃるそうです。でも、これは私たち、笑えないですね。みんな同じような、悲しさを抱えていると思います。そして、そういう思いに苦しんでいます。イエス様は、そこから解き放とうとしてくださっているのです。

そういうことをしっかり念頭におきながら、第一の具体例として「施し」ということを考えていきます。ここでいう施しというのは、直接的には貧しい方への援助です。貧しい者を助け

るようにというのは、旧約以来の聖書のすすめ（申命記15:7, 10、ルツ記の落穂ひろいなども）、初代教会のキリスト者たちもそういう施しのわざに励んだことが使徒言行録などから知られています（4:34）。私たち日本のキリスト者は経済的に恵まれた環境を与えられていますから、貧しい国の人々のための施しということをいつも考えていないといけないなど改めて考えさせられるのですが、問題はそういう施しをなす際の心のありかたです。

面白いエピソードがありまして、エルサレムに留学していた先生の話ですが、ユダヤ人社会では施しを受けるほうの人たちが、ずいぶんと偉そうなのだそうです。「お前の徳をあげることに貢献してやるから金をよこせ」という態度。施しという行為は非常な美德として賞賛されているし、神からも喜ばれると認められている行いですから。だから「おれはお前にいい行いをさせてあげるのだ、感謝しろ」という感じなのだそうです。変な話ですね。

これは現代のユダヤ社会の話だが、イエス様の生きておられた当時のユダヤ社会と別物ではありません。むしろ、そのようないびつさを生み出す病気の根が、ここにあります。「だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはいけない。」

「ラッパを吹き鳴らす」というのは面白い表現で、実際そういう習慣があったとも言われますが、結局要するに、施しをしたということを誰の目にも分かるように宣伝する、吹聴するということが否定されているのだと思います。

「偽善者たち」という言葉も面白い言葉です。これは元来、「俳優」を意味する言葉だそうです。日本語でもありますね、嘘が上手い人のことを「役者だなあ」と。心で何を思っても、表面上は違う演技をするのが役者です。喜劇役者っていうのは、親が死んだ日でも喜劇を演じるからこそプロです。そういう風に、表と中身が違うことが「偽善」だとされています。表面上は人を助けるための施しで、人の目なんか何も気にしていないよう。でも心の中では、計算が働いている、何人の人が見ているかなとか。今月本当はふところが苦しいんだけど、たくさんの人が見てるから仕方ないなあ、施ししようなんて。そんな風に「施しをしておりますよ」とラッパを吹いてはならない。

そしてこう続く。「はっきりあなたがたに言うておく。彼らはすでに報いを受けている。」この報いを受けてしまっているという言葉は、元々は商取引で用いる言葉遣いで、「すでに全額受領済み」ということです。全部もらっちゃった。何をもらったかと言えば、人からの賞賛です。名誉です。そして自分への尊敬であり、評価です。それがほしかった。そして、ほしい分だけ全部もらった。それ以上は期待もしていないし、期待もできない、でもほしい分だけは全部もらった。でも、本当にそれがすべてかい？それでいいのかい？と、イエス様は問いかけておられるのです。そんなセコイものが、あなたの求めるすべてなのか？これは人間としてのスケールの問題でもあります。もっと大きなものを、私たちは見るべきではないでしょうか？

イエス様はこう続けられます。「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせては

いけない。あなたの施しを人目につかせないためである。」右の手のすることを左の手にも知らせはならないなんて、いつもながらイエス様の言葉には圧倒されますね。どうやったらそんなことできるだろうかなんて考えなくていいですよ。そうじゃない、これは誇張した言い方でメッセージをクリアーにしようとしておられるのです。ここでイエス様が伝えようとしておられること、それは自分の行いを自分に対しても隠せということです。今ぼくはちゃんといい行いをしているなど、自分の中で確認することをやめろ。そして、自分で自分をほめるなんてこともしないでいいと言うのです。そこまで徹底して、人間の評価ということを考えるのをやめなさいと、イエス様はおっしゃりたいのです。自分もまた人間です。小さくて、日ごとに心が揺れ動く、弱い人間です。そんな人間の評価に、心縛られるのはもうやめなさい。人からほめられなくてもいい。自分にほめられなくてもいい。誰にもいい格好する必要なんかない。人間の目など一切気にするな、それがイエス様の伝えようとしてくださっていることです。

そして、こう締めくくられます。「そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」父が報いてくださるよ。父とは、天の父なる神様です。神は私たちの父として、限りない慈しみをもって髪の毛一本さえ無駄に落ちることがないように守ってくださいます。その父が、報いてくださる。これは、もう本当に端的に申し上げて、くしゃくしゃにほめてくださるということだと私は解釈しています。今は私たちには神は見えません、その声を直接お聞きすることはできません。しかし終わりの時に到来する神の国において、私たちは完全な慰めの中に入れられて、神と顔と顔をあわせ、神のもとで安らぐことができます。その時に、父が、くしゃくしゃにほめてくださるのです。よくやった私の息子よ、私の娘よ、お前は私の教えに生きようと、精一杯がんばった。疲れたろう、たくさん傷ついたろう、たくさんのおちも犯したね、たくさん失敗したね、でもお前は精一杯がんばったと・・・くしゃくしゃにほめてくださるのです。

この 4 節は面白くて、「あなたの施しが隠れたところでなされるなら、そうすれば、隠れたところを見ておられる父が、報いてくださるよ」という言葉です。この言葉の中心にあるのは、父は隠れたところでの善い行いをちゃんと見ていてくださるよという、慰めのメッセージです。ですから、絶対匿名じゃなきゃいけない、自分の施しとか献金は隠さないといけない、そうしないとほめてもらえないなんて考えないでください。そうじゃないのです。あなたが今、誰からも見られない、自分にも見られないような隠れたところにいるならば、そこで振り返ってごらん。そこにあなたの父はおられるよ。父は、その隠れたところにおられて、あなたをちゃんと見ておられるよ、とイエス様は教えていてくださるのです。

だれも見えていない、だれもほめてはくれない、あなたの隠れた善行。それは地上的な物差しではかれば、何もしなかったことに等しいとさえ言われかねない。そんなことには意味がないとさえ言われるかもしれない。でも、意味はあるとイエスは言うてくださるのです。だれも見えていなくても神は見ておられる。それに正しく報いてくださる。

イエスは私たちの弱さをご存知です。一生懸命奉仕をしているのにだれからも感謝されない、こちらの生活を削ってまで施しをしたのに何も反応がない、そういうのはとてもつらいものです。まことの人間であるイエス様は、そういう人間の感情の機微を全部御存知です。私は、人間の社会にあっては、少なくともこの教会にあっては、そんな寂しさを誰一人味わうことがないように、互いに細やかな心配りがなされてしかるべきだと思います。誰からもほめられず、誰をもほめず、そんな人間味を失った集団は、キリストの教会ではないと私は考えます。今日の教えは、そういう人間的なぬくもりを一切拒絶せよのものではありません。そうではなく、あまりにも人間の評価を気にしすぎる私たちの心を、そういう窮屈さから解き放つための、解放の言葉であることを、よく覚えていてください。

人間の評価などどうでもいい、神がくしゃくしゃにほめてくださる。神は、神の教えに懸命に従おうとしている私たちの一挙手一投足を、一つももらすことなく見ていてくださいます。その神の評価は、永遠の輝きを帯びるのです。地上の評価は移り変わり色あせませます。永遠の神の評価に思いを向けるのです。天を見上げなさい。もっと大きいもの、もっと高いものへと心向けなさい。この天井の向こう、吹きぬける青空のように広く自由な世界へと、イエス様は、私たちを招いていてくださいます。